

# ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-1)

— Johann Christoph Gatterer と世界史 —

岡崎 勝世

## 目次

- 一、はじめに
- 二、生涯と活動
- 三、四種の世界史叙述
  - (1) 『普遍史教科書』(1860)
  - (2) 『普遍史序説』(1771)
  - (3) 『世界史』(1785)
  - (4) 『世界史試論』(1792)
- 四、小結

### 一、はじめに

ドイツではドイツ啓蒙主義歴史学は従来ほとんど評価の対象とならなかった<sup>①</sup>。勿論啓蒙主義の時代は歴史学史において重要な研究対象となってきたが、それは端的に言えばヘルダー、シラー、ゲーテなどの時代であり、ロマン主義を経て歴史主義の成立につらなる流れの出発点とされてきた<sup>②</sup>。勿論筆者はこの大きな流れそのものを否定するものではない。しかし、啓蒙主義の時代である18世紀にはドイツにもやはり啓蒙主義そのものと直接の関係結びつつ研究を遂行していった一連の歴史学者たちが存在していたのである。彼等は自己の生きた時代の要請に応えるべく孔々として努力を続けたし、またそれを通じて新たな歴史学の時代の準備も整えていったのである。本稿は直接にはドイツ啓蒙主義歴史学の代表者の一人ガッター(Johann Christoph Gatterer, 1727~1799)の世界史叙述、特に理論的枠組である「構想」について考察しその歴史的意義を明らかにすることを目的としている。しかし筆者が今後予定してい

る一連の論考を通じて目指すものはこうした啓蒙主義歴史学の果たした役割を再評価し、それによってドイツ歴史学史、ひいてはドイツ思想史研究に一つの寄与をすることなのである。ここで結論的見通しを最初に述べることを許していただけるなら、ドイツ啓蒙主義歴史学の最大の意義はそれが「普遍史から世界史へ」の転換点となったことに存するというのが筆者の考えである。即ちそれは中世的・キリスト教的世界史叙述である「普遍史(Universalhistorie)」から近代的・科学的「世界史(Weltgeschichte)」への転換期として最も大きな意義を有しており、またそれは単なる過渡的時代ではなく、前代とも19世紀とも異なったドイツの歴史学の一つの独自の時代を形成したと考えるのである。

さて、ドイツでは啓蒙主義歴史学の意義については、ディルタイなどの少数の例外を除き<sup>③</sup>、近年までなおこの否定的見解が支配的だったと言えることができる。そこでは「ゲッティンゲン学派」もその存在さえ否定されていたほどである<sup>④</sup>。我が国においても同様で、ドイツ啓蒙主義歴史学の代表者

とされるガッテラーや歴史家としてのシュレーツァーに関する研究は殆ど見られない<sup>⑤</sup>。一方、大戦後は歴史学の発展において啓蒙主義が果たした役割を積極的に評価しようという動きはバスターフィールドやピーター・ゲイらによってドイツ外でまず始まり<sup>⑥</sup>、1970年代に入るとイッガース、レイルらによって一層この傾向が強められた<sup>⑦</sup>。ドイツでもこうした動向と並行して、また19世紀的ドイツ歴史学批判の動きと結びついて、ドイツ啓蒙主義歴史学再評価の動きが強まっているというのが現在の状況といえよう<sup>⑧</sup>。そしてこのような動向の中で注目されている一人がガッテラーなのである。彼は19世紀前半にはなおその名声を保持しており、「科学的形態と歴史的百科全書的内容を有する世界史の著名な創始者<sup>⑨</sup>」と高く評価されていた。しかし既に19世紀後半になるとシュレーツァーとともに「殆ど完全に忘却の彼方の人<sup>⑩</sup>」となってしまう、辛うじて歴史補助科学発展への貢献に対する高い評価を維持していたに過ぎない<sup>⑪</sup>。これに対して近年のガッテラー再評価は独立した一科学としての歴史学確立のための活動、とりわけ歴史学の特質をめぐる理論的活動に焦点が当てられている<sup>⑫</sup>。他方、ガッテラー自身に即して言えば、彼が一貫して追求したのは何よりも新しい世界史叙述であり、また当時高く評価されたのも彼の叙述の「新しい方法」<sup>⑬</sup>の故であった。しかしガッテラーの世界史叙述自体については従来彼が世界史叙述の「素材を拡大」<sup>⑭</sup>したこと、また旧来の四世界帝国論の枠組を破ったことの二点が評価されてきたものの、叙述そのものについては「歴史学史にとって何の意味もない」<sup>⑮</sup>とすら言われてきたし、最近のガッテラー再評価の動きにおいても彼の世界史叙述の意義に関しては十分に考慮が払われていないのが現状である。筆者自身はもともと西欧における世界史叙述の歴史について関心を持ち、若干の論考の発表も行ってきた。本稿では上のような現状をも踏まえてまずガッテラーの世界史叙述そのものに

注目してその意義を考察したい。

## 二、生涯と活動

ガッテラーは1727年ニュルンベルク郊外のリヒテナウで生れた<sup>⑯</sup>。家庭環境は学問の道に進もうとする者にとっては最悪の部類に属していた。父は荷物運びの下僕からたたきあげた軍人で最後は竜騎兵下士官となった人だが、文盲でもあり、「あらゆる科学的教養に対する嫌悪」<sup>⑰</sup>を持っていたという。そして息子は手工業者になると決めていた。このため9才から16才までのニュルンベルク市立学校通学中、家では少年ガッテラーは読書も文字通り父の目を盗んでしかできなかったという<sup>⑱</sup>。歴史学者ガッテラーに出発点を与えたのはこうした父ではなく母親のほうであった。彼女は毎日歴史書や宗教書を読み聞かせて息子の知識欲を喚起してくれ、また後には父を説得して息子のラテン語学校進学を承諾させている。1747年19才でアルトドルフ大学に進学し最初神学者を目指したが、後に歴史学に転じて1751年には大学修士の学位を、翌年には24才で私講師の資格も獲得している<sup>⑲</sup>。この間は父の経済的支援など得られる筈もなかったから、常に厳しい経済的困難の中で、まさに寸暇を惜しんでの克苦勉勵の日々が続いた。見かねて恩師ホイマンが自分の娘達の家庭教師に雇ってくれたほどである。ガッテラーは当時のドイツ「学者共和国」の中では異色の、文字通りの「立志伝中の人」<sup>⑳</sup>であった。もっとも、彼の欠点として指摘されている非社交性と、歴史家としてはもっと重大な問題であるが、政治の世界への無関心とはこうした青年時代の困難な状況に大きな原因があると考えられる<sup>㉑</sup>。

学業を終えたガッテラーは同じ1752年急遽ニュルンベルクのギムナジウム教師として故郷に帰ることになった。彼自身はアルトドルフ大学に残ることを希望していたが、この年同市市長が彼を招聘したからである。市長はニュルンベルクの名門



貴族ホルツシューアー家の当主だったが、かねがね一族の歴史を記述してくれる人材を捜しており、その眼鏡にかなったのがガッテラーだったというわけである。実際彼は期待された通りその歴史の研究に取り組み、1755年には『ホルツシューアー家史』の第1部が刊行されている<sup>22</sup>。この研究は必然的にドイツ中世研究に、とりわけ古文書学、紋章学、年代学等の研究に彼を導いて後の彼の歴史補助科学確立という大きな業績に出発点を与えた。またこの著作を通じてガッテラーがラテン語の能力において極めて優れていることも広く認められた。他方1756年にはギムナジウム副校長になり、同時に同地のリュツェウムの歴史及び古文書学の教授となるなど教育者としても高い評価を受けている。そしてこうした若い有能な教育者、研究者としての名声が彼の生涯に一大転期をもたらしてくれることになった。即ち1759年32歳のガッテラーはゲッティンゲン大学歴史学教授への招聘を受けるのである。彼は直ちにゲッティンゲンに移住し、以後死ぬまで40年間この地を離れることはなかった。ゲッティンゲン大学は1734年に発足したばかりであったが、新設の有利さを生かして他大学にない特質を備えていた<sup>23</sup>。大きくは二点が挙げられるが、いずれもハノーヴァーの大臣でゲッティンゲン大学創設に尽くし、初代学長にもなったミュンヒハウゼンの進歩的方針に多くを負っている。先ず第一に、彼の方針でゲッティンゲン大学では神学部が極力押えられ、ドイツの旧来の宗派的大学に見られるような宗教的束縛が排除されていた。その最も大きな結果は大学人としての活動に関しては検閲が全廃されたことである。この点ではハノーヴァーが当時既に検閲を廃止していたイギリスと同君連合の関係にあったことも有利に働いた。まだ他の全てのドイツ大学が神学部の支配と煩瑣で偏狭な検閲に呻吟していた中で、こうしてゲッティンゲンでは自由で活発な研究と教育が展開されつつあったのである。第二

の特色は図書館であった。ミュンヒハウゼンは大学における図書館の重要性をよく認識し、全力を挙げて膨大な内外の図書を集めただけでなく、教授や学生がこれを自由に利用できるようにしたのである。このような好条件に恵まれて名声を高めつつあったゲッティンゲン大学にガッテラーがミュンヒハウゼン自身の招きで迎えられたのである。そしてまた彼自身も大学の一層の隆盛に大きな役割を果たしていくことにもなった。彼の講義はたちまち有名になり、11年後にシュレーツァーが同僚かつ競争者としてゲッティンゲン大学に赴任するまでは、聴講者が教室からあふれて窓の外で聞くものすらいたという。そしてこの二人にさらにシュピットラー、ヘーレンなどが加わっていわゆる「ゲッティンゲン学派」が形成され、ゲッティンゲン大学はますますドイツ歴史学のメッカとしての地位を高めていったのである。

詳しくは後で見ることにしたいが、ここで当時の歴史学の位置と課題について見ておこう<sup>24</sup>。当時、少なくともドイツでは、歴史学の活動分野は極めて狭く限定されていた。本稿で問題としている世界史叙述については、17世紀末以後プーフENDORF等法学者がこの分野に参入してくるが<sup>25</sup>、基本的にはこの分野は伝統的に神学者が担当してきた。そしてこの間歴史家達に残されていたのは王侯、貴族たちの「家系史」の分野が主なものだったのである。ガッテラー自身のニュルンベルクにおける仕事もまさにそうした性格のものであった。他方フランス、イギリスではヴォルテール、モンテスキュー、ヒューム等によって啓蒙主義的歴史学が発展し、神学への従属を断ち切って新たな歩みを開始していた。また、ヨーロッパの対外的発展によって研究の対象そのものも旧来の歴史学のそれとは一変した。18世紀はヨーロッパにアジア世界が本格的に紹介され始めた世紀であるが、イエズス会士等の活動によって中国をはじめアジア諸国の高度の文化とその歴史が紹介された。そしてこ

れにより中世以来の「普遍史」で扱われてこなかった巨大な、しかもヨーロッパよりはるかに古い歴史を有する新たな世界が彼らの前に出現したからである<sup>26</sup>。こうした状況のなかで歴史学は新たな、しかも重大な課題に直面していることを自覚せざるを得なかった。まさに、「当世紀のあらゆる声が包括的かつ科学的な世界史を求めている」<sup>27</sup>からである。こうした一般の状況のみでなく、さらにゲッティンゲン大学自体もガッテラーが世界史研究に向かうことを求めている。なぜならゲッティンゲン大学は歴史学教授に世界史の講義を委ねることで、この問題を歴史学自体が解決することを求めているからである。ガッテラーはこれまでドイツ中世を専門分野として出発し、旧来のドイツ歴史学の狭い枠内で活動してきた。しかし、ゲッティンゲン大学に移ったことにより、それまでと全く次元の異なる大きな問題と課題の中に投げ込まれたと言えよう。そして彼の40年に亙るゲッティンゲン大学での活動は、まさにこうした大学と時代の要請に応えんとして行った苦闘で満たされていくことになるのである。

以上の状況のなかでガッテラーにその解決を要請されていた課題は大きく二つあったと言えよう。まず第一には独立した一科学としての歴史学確立の課題である。このために彼が行った活動は次の二点にまとめることができる。一つは自然科学その他の諸科学とは異なる歴史学の特質を考究し、その独自の性格を主張するための理論的活動、二は歴史補助科学自体の整備、及びそれらと歴史学との関係確立のための現実的活動である。前者は他の諸科学との区別を、後者は隣接諸科学との区別及び協力関係を明らかにし、それらを通じて歴史学の独自の地位を主張しようとするものと言える。このうち後者については彼自身紋章学、系譜学、古文書学、地理学、年代学に関する、いずれも高い評価を当時得た多くの著作を著しており<sup>28</sup>、この側面に関しては従来も一貫して高い評価が与えられ

てきていること、また、前者については近年再評価が行われつつあることは既に見た通りである。第二の課題は独自の一科学としての歴史学に対し、それにふさわしい内実を現実を与えるということである。これについても彼の行った活動は次の二点にまとめることができる。一つは当時の新しい世界史叙述への要請に現実に応えることであり、二は今後の歴史学発展を支えるための体制の整備である。後者については彼はゲッティンゲン大学に「歴史学研究所」を設立し、また研究所における研究活動を基盤として歴史学専門雑誌を刊行していった<sup>29</sup>。両者はともにドイツでは最初のものであり、その組織者かつ指導者としての活動によって、彼は「ゲッティンゲン大学がドイツにおける歴史学の学校となるにあたって本質的貢献をした」<sup>30</sup>。彼が「ゲッティンゲン学派」の開祖とされる所以である。他方前者については彼は生涯でそれぞれ枠組の異なる四種類の世界史叙述を試みている。一人の歴史家が根本的な枠組そのものを四度も変えたということは大変奇異にも映るのだが、実はこのことこそがガッテラーの、さらにはドイツ啓蒙主義歴史学の特質と大きく関係しているのであり、また本稿の考察のテーマとなる特質なのである。

### 三、四種の世界史叙述

ガッテラーはゲッティンゲン大学に移った翌年に『普遍史教科書』(1860)を出版し、以後ほぼ10年間隔で『普遍史序説』(1771)、『世界史』(1785)、『世界史試論』(1792)を出版していった<sup>31</sup>。『教科書』はガッテラーが本書の段階で世界史叙述の素材収集をほぼ終えているという意味で、また彼の方法論が固まったという意味でも出発点となった著作である。次の『序説』では『教科書』で得た基礎資料と方法論を土台に練り上げた彼の最初の世界史の理論が叙述されている。しかし最初の理論化の試みに満足できなかった彼は次の『世界史』では大きくその構成を変えた。そして最後の『試



論』でも再度世界史の構成を変えた。『教科書』が「起」、『序説』が「承」、『世界史』が「転」とすれば、本書は世界史の理論家としての彼の活動の「結」となる筈のものであった。しかしそれがなお「試論」と題されていることにガッテラーの40年間に亙る苦闘が象徴されているように思われる。本稿では以上のような性格を有する彼の四種の世界史叙述について各々の「構想」を紹介し、その基本的性格と意義とについて考察していくことにしたい。

### (1) 『普通史教科書』(1761)

ゲッティンゲン大学に赴任し、初めて世界史の講義を担当したガッテラーはそこで大きな問題に直面した。彼は「序文」で本書の目的と本書が著された事情とについて次のように言っている。「私が本書を著したのは、さし当りは、私が当地の大学で行わなければならない普遍史の講義のためである。有用な教科書が皆無であるという事情が本書のような全く新しい構想による著作を敢えて試みさせたのである。」<sup>②</sup>この言葉にガッテラーの時代のドイツ歴史学の問題が集約されているように思われる。ただし「有用な」教科書が皆無とはいえ、勿論教科書が皆無というわけではなかった。ガッテラーはそうしたものとして「近代諸国家の制度と歴史」についての近年の諸著作を挙げている。しかしこれとて「古い時代の歴史を完全に忘れており、少なくともそれに関する優れた教科書を書くなどとは誰も考えつかなかった」という状況だったのである。結局彼は自身でこの問題を解決しなければならなかった。そしてその努力の結果が「全く新しい構想」を有するこの『教科書』だったわけである。本書は大きく二部からなっている。その第一部はガッテラーの歴史学の基本性格を論じている長大な「序論」を含むが、大部分が歴史家の解説と文献改題に当てられている。第二部が世界史記述に当る部分で、大ざっぱに言ってヨーロ

ッパに関しては5世紀まで、アジアについては当時における現代までの概説的歴史叙述に当てられている。

第一部で重要なのは「序論」で、冒頭で彼は歴史学を次のように定義している。「歴史とは重要な諸事件に関する科学であり、歴史術または歴史科学とは読む価値のある歴史書を著述するための諸規則に関する科学である」(1)。それでは歴史科学の真の任務であり目的でもある「読む価値のある歴史書」にはどのような要素が盛り込まれるべきなのであろうか。ガッテラーによれば、歴史家においては才能、党派性、叙述においては事柄の精神、歴史的証明、歴史的構想、叙述の基礎としては収集された史料、翻訳された史書がそれである。そして「これら諸要素の中で最も重要なのは事柄の精神である」(2)。例えば古代ギリシアやローマ共和国における「自由」のように、「個々の時代、個々の国民には各々それに固有な事柄の精神が存在する」(3)からである。新しい歴史学は歴史家によって証明された「事柄の精神」を、歴史家の「構想」に従って叙述するのである。そして歴史学の真の任務を従来「普遍史」は顧慮してこなかったと批判する。即ち「歴史の本質が戦争、戦闘、殺人、御伽噺めいた話やそれに類する物語の細々とした叙述にあると考える時代は終わったのである」(69)。以上のように新しい歴史学の任務を規定した上で彼は歴史を学ぶ学生の取るべき態度、史料や歴史書の解説などを行っていくのであるが、その中で特に注目すべきことは次の二点であろう。第一点は歴史補助学の分類である。彼はここで年代学、地理学、系譜学、紋章学、古銭学、古文書学を取り上げている。これは彼の時代に「補助学」と考えられた分野を示している訳であるが、これら諸学こそ今後彼が大きな業績を残していく分野ともなったものである。第二点は彼の歴史叙述の方法論である。彼によれば普遍史の叙述には、いずれも「国家と民族」を叙述の単位とするのだが、「通

時的または総合的方法」と「共時的又は分析的  
方法」(69)とがある。二方法は「両者を等しく尊重  
しなければならないが、しかし、その内容からい  
って両者を同時には満足できない」(同)という性  
格を有している。結局ガッテラーは対象の性格に  
従ってその都度どちらかの方法を基準としていく  
ほかないとするのだが、その際特に「新しい普遍  
史」(70)が持つ課題として「共時性」の重視、及  
び「古い時代の諸国家をどのように秩序だてるべ  
きか」(同)の問題の二点をあげている。彼は今後  
は文化史叙述に重点が移るにつれて次第に「共時  
的」方法を重視するようになるであろう。また叙  
述の構成単位を一国家、一民族に置くという原則  
は生涯持ち続けた。さらに共時性の重視は年表の  
作成と利用や、またしばしば他国、他民族の同時  
代の事件を挿入するという彼の叙述法となった。た  
だし、最後の古い時代のあるべき構成の問題につ  
いては生涯揺れ続けていくことになる。

題二部にあたる「普遍史」の実際の記述をみよ  
う<sup>33</sup>。ここでは最初の二章で天地創造から大洪水ま  
で、大洪水からアブラハム誕生までを扱い、3章以  
後22章までは全て民族又は国家単位で章が立てら  
れ、各々の歴史が叙述されるという構成になって  
いる。そこでは大帝國を形成したアッシリア人や  
バビロニア人、ペルシア人、ギリシア人、エジプ  
ト人、ローマ人は勿論、『旧約聖書』に登場するシ  
リアやパレスティナの小民族からケルト人、スキ  
ュティア人や、またトロヤ人、小アジア諸民族な  
ど当時知られていた様々な小民族も網羅されてい  
る。しかし本書の第一の特徴はアジアの諸民族に  
も大きなスペースをあてていることである。アラ  
ブ人とインド人、中国人、朝鮮人とチベット人、そ  
して最終章を飾っているのが日本人の歴史なので  
ある。当時ドイツはケンペルによる日本紹介は既  
に知られていたが、これを世界史叙述に取り入れ  
た例としてはガッテラーは、少なくとも、最も早  
い一人であると言えよう<sup>34</sup>。また、これら各々の民

族について著作家、風土、歴史、制度の四項目が  
立てられ、「歴史」の項では政治史が、「制度」の  
項では宗教制度、政治制度、家族制度、教育制度  
について叙述されており、このように文化史的記  
述が大きな内容を占めていることも本書の特徴と  
言えよう。さらに第三に、本書がもはや伝統的な  
「四世界帝國」の構成をとっていないことも特徴と  
して確認しておきたい。アジア諸国に大きなスペ  
ースを与えた以上伝統的な「四世界帝國論」による  
構成はもはや不可能となったからではあるが、こ  
のことはやはり、後で見るように、当時のドイツ  
においては画期的なことであった。もっともガッ  
テラーが『聖書』に基づく歴史叙述そのものを否  
定した訳ではないことは最初の二章でも明らかで  
ある。それに加えて年代の算定が主としてパタウ  
ィウスに拠りつつ行われ<sup>35</sup>、年号が「世界年代」で  
示されていることもあげられよう。最後に、以上  
のような内容を有する叙述を行うに当ってガッテ  
ラーが手本としたのはフランスとイギリスの諸研  
究であったということにも注意しておくべきであ  
ろう<sup>36</sup>。彼は「序文」で「ロランの全著作と『普遍  
史』及びバウムガルテンの本書への注」を挙げ、こ  
れらなしでは「本書に現在あるような形態を与え  
ることは容易なことではなかったろうと感謝をこ  
めつつ率直に告白する」といい、そしてヘブライ  
語、ギリシア語、ラテン語の史料に関しては原典  
にあたったし、またアジアについても自分なりの  
整理と改善は行ったとはいえ、「私の『教科書』の  
多くの部分はこれらの著作の抜き書きに他ならな  
い」とも告白しているのである。ロランを始めと  
するフランスの歴史学と『普遍史』を産み出した  
イギリスの歴史学にしか範例を求めることができ  
なかったということが、逆に当時のドイツ歴史学  
の現状をよく物語っている。

さて、上ではその構成からくる諸特徴を見てきた  
が、全体としてみればその構成そのものはまだ世  
界史の理論という意味での「構成」とはなってい



ないといえる。一民族、一国家を構成単位とする原則に従って大小様々な民族がほぼ並列的に記述されており、また、例えばカルタゴ人に関する章はディドーによる建国から滅亡までの740年間、中国人や日本人の場合は神代の時代から18世紀までというように各章の年代的枠組が区々だからである。そして各民族の歴史的位置や相互関係等は構成としては現われていないからである。本書におけるガッテラーを世界史叙述の基礎素材収集の段階とする所以である。

## (2) 『普遍史序説』(1771)

本書は第一部で「普遍史」の一般的基礎として風土、人間(人種、人口、言語)などについて触れた後、第二部で「普遍史」を叙述している。この第二部において彼は『教科書』で得た素材を基礎に彼の最初の世界史叙述の構想を練りあげ、「四大時期、八大支配民族、十二の世界史的事件」(37)という言葉でそれを表した。但しキリスト以前の年代は『教科書』同様ベタヴィウスによっている。以下まずその構想を見よう<sup>⑦</sup>。

第一期、歴史的応急手段の時代。天地創造から諸民

族の形成まで、世界年代1年から1809年まで。

第二期、聖書記者と古典的著述家の時代。諸民族の形成から民族移動まで、世界年代1809年からキリスト紀元5世紀まで。

1. 諸民族の形成。1809年。
2. アッシリア的諸民族体系。1809～34 $\frac{25}{46}$ 。
3. ペルシア的諸民族体系。3425～3654。
4. マケドニア的諸民族体系。3642以降。
5. ローマ的諸民族体系。キリスト紀元5世紀の民族移動まで。
6. パルティア=ペルシア的諸民族体系。アラビア人の支配まで。

第三期、中世。年代記作家と古文書書記の時代。民族移動からアメリカ発見まで、5世紀から15世紀末まで。

1. 民族移動。
2. 後期ローマ帝国。アナスタシウス1世からトルコ人によるコンスタンティノープル征服まで、491年から1453年まで。
3. ドイツ=スラヴ的諸民族体系。民族移動からアメリカ発見まで、5世紀から15世紀まで。
4. アラブ的諸民族体系。アメリカ発見まで。
5. トルコ=モンゴルの諸民族体系。アメリカ発見まで。

第四期、収集家、美学者、批判家、プラグマティストの時代。アメリカ発見以後の近代、1492年以降現在まで。

1. ヨーロッパ諸国。
2. 諸外国。

上の「四大時期」のうち第三、第四期にはそれぞれ「中世」、「近代」という名称が与えられていることにまず注意したい。また本文中では第二期の記述の中で「古代」(5)という時代名が使用されている。これらの「四大時期」を区分する指標は、上に見られるように、天地創造、諸民族の形成、民族移動とアメリカ発見という歴史的事件にあるが、また「歴史的現実の認識根拠」(4)の相違にも対応している。即ち第一期は歴史的応急手段としての『聖書』の記述しか存在しない時代で、「全てについてモーセが根拠とならざるを得ない」(5)時代である。しかし、第二期開始直後にフェニキア人トトまたはターウトによって文字が発明され(1829年)、三千年紀半ばになると最古の歴史家モーセとサンコニアトンが出現するに至る。中国その他でも史書が現われて来るが、しかし「最初の何百年かは『聖書』が唯一の史料であり、四千年紀にはいってようやくギリシアで……歴史時代が開始され」(6)古典的歴史家の時代となる。中世になると「年代記の父」(7)エウセビオスを継いだ多数の年代記作家が現われ、また様々な古文書を残してくれた書記たちが活動した。西洋以外では特に中国における歴史家の活動が顕著であった。

第四期近代は素材の収集のみをこととしたり、素材を無批判に使用して歴史叙述を行う「収集家」、歴史的眞実より「文体の趣味」(10)を重視する「美学者」(同)、歴史における眞実と虚偽の区別に努力した「批判家」、そして最後にこの批判家から眞なる素材を受け取るが「それら処理するに当っては哲學的精神をもってする」(同)プラグマティストの時代となる。もっとも今日においても「前二者は大量に存在するが、優れた批判家とプラグマティストはほとんど見られない」(同)。ガッテラーはもちろんこの数少ない「批判家」に属すると同時に、また「プラグマティスト」に属する。というよりは彼こそは自らの新しい歴史學をプラグマティズムの名称で特徴付けた人だったのである<sup>19</sup>。

「四大時期」の具体的内容はどのように構想されているであろうか、まず第一期はアダムとエヴァに始まり、民族は勿論國家も存在しなかった約1800年間である。この間に生じた世界史的事件は三つある。①そもそも地上における人類の歴史の起点となったアダムとエヴァの「墮罪」、②アダムの時代に始まる農業、牧畜に加えてレメクの息子たちによる「諸技術」の發明(900~1000)、及び③「大洪水」(1656年)である。第二期古代開始の画期となっている1809年はニムロデとメネスによるカルデアとエジプトの王國成立の年で、同じ頃中國では堯が活動していた。既に存続してきた「神の民」は言うまでもなく、インド人、ギリシア人等も同時代に、そして次の世紀には日本人も形成される。このようにあらゆる民族が形成されていく時代がここから始まる。勿論これら全民族はノアとその息子たちの子孫である。こうした諸民族形成期に続いて「八大支配民族」の時代が始まる訳であるが、この時代は「民族移動」を経て中世全体を含んでおり、この意味では古代と中世は質的には同一の時代と位置付けられていると言える。支配的民族として八民族を選んだのは「それらが全民族の歴史を通時的秩序に従いつつ、且つ其時

的連関において叙述することに役立つからであるが、それというのもあらゆる時代に支配的民族に対し多数の民族が時には臣下として、また自己の自由の保護者として、あるいは支配權の競争者として何がしかの關係を結ぶからである」(13)。そしてこのような歴史的世界を一つの歴史の構造体としてそれぞれに支配的民族の名称を冠しつつ「諸民族体系」(同)、或いはその内実に即して「從属体系」(同)とも呼んでいる。またこれらの「諸民族体系」間には一定の繼起的關係が存する。というのは「全ての支配民族はそれが支配者になる以前は他の民族に從属していたか、または自己の自由の保護者としての他の民族に結合」(20)していたからである。この繼起的關係は大きくは二段階に分けられる。第一段階ではまず①アッシリア人と②ペルシア人によりアジア人の支配する二大諸民族体系が、続いてアジア人支配への「復習」(12)に成功した③マケドニア人と④ローマ人によってヨーロッパ人の支配する二大諸民族体系が相次いで出現する。それに対して第二段階ではアジアとヨーロッパに別の体系が成立し、両者が対立しつつ各々の地域で体系が繼起していくのである。即ちヨーロッパ側ではローマ人に続いて⑤ドイツ人(及びスラヴ人)が諸民族体系を形成し、他方アジアではローマに対抗しつつ⑥パルティアとササン朝ペルシアが支配民族となる。さらにドイツ人に対抗しつつアジアでは⑦アラブ人、次いで⑧モンゴル人とトルコ人が各々自己の支配する諸民族体系を展開していくのである。「十二の世界史的事件」では古代における④偶像崇拜と⑤科學の發生(ともに世界年代19世紀)、⑥キリスト生誕(3983年)を挙げ、中世については⑦ローマ教皇權の成立とマホメット、⑧十字軍、⑨印刷術、コンスタンティノーブル陷落及び諸科學の再生を挙げている。ただしこの間アメリカはまだ発見されておらず、アフリカも、エジプトを除いては、上の諸民族体系とは何ら係りをもたなかった。最後に第四期近代



では上の古代、中世以来の従属体系も存続するが、「これに加えて新たに同盟体系が形成される。それは若干のヨーロッパ諸国が他の大陸に従属国を獲得したことによってこれらの諸国が優勢になったことが原因となり、形成されたものである。」(14) かかる意味で近代は前の諸時代とは質的に異なる歴史的一段階であり、またそれゆえアメリカ発見が時代を画する事件として選ばれているわけでもある。世界史的事件としては⑩宗教改革とトリエント宗教会議、⑪「同盟体系」形成の出発点ともなったヨーロッパの勢力均衡とウェストファリア条約、⑫新しい哲学が挙げられている。最後の「哲学」については特筆すべき哲学者としてコペルニクス、フランシス・ベーコン、デカルト、ライブニッツ、ニュートン、トマジウス、ヴォルフの名が挙げられている。

以上ガッテラーの「諸民族体系」の概念による構想の大枠を見てきた。以下では彼の叙述方法を簡単に見ておきたい。まず、上にみた「八大諸民族体系」が設定されたのはそれが「全民族の歴史を通時的秩序に従いつつ、且つ共時的連関において叙述することに役立つ」からであった。こうして、例えば「アッシリア的諸民族体系」の章では支配民族の変遷(アッシリア⇒メディア、アッシリア、スキュティア並存⇒メディア、バビロニア並存⇒メディア、リュディア、バビロニア並存)を通時的に叙述し、且つその体系に所属した民族としてキンメリア人、ミュシア人、カリア人、リュキア人、キリキア人、フェニキア人、モアブ人、アンモン人、エドム人や「神の民」等が共時性の観点から網羅的に叙述されていくのである。そしてここにも見られるように具体的叙述の場面では『教科書』以来の「一民族、一国家単位」という原則が守られている。しかしその結果オリエントや小アジアの小民族に関する煩瑣な叙述が多くなり、きわめて雑然とした印象を与えるものとなっている。他方ガッテラーは次のようにも言う。「特定の体系

に所属しない民族は叙述においては存在しないものとみなされ、その民族が舞台に現実にその場を獲得するまでは、または同じことだが、ある諸民族体系の一員にまで展開を遂げるまでは叙述されない」(13f.)。この原則によって、例えば中国史は「民族移動」の章で語られることになる。何故なら「この全民族移動の主要原因はアジアの東部でキリスト紀元1世紀に中国人とフン族の間に起こった紛争にある」(630) からである<sup>⑬</sup>。ただしこのためヨーロッパの民族移動の叙述に入る前に53ページにわたって隋に至るまでの中国史及びフン族がヴォルガを渡るまでの中央アジア史が挿入されることになり、これだけで例えば第四期全体の21ページに二倍する分量を占めることになってしまった。もっとも彼の方法に起因すると考えられる欠陥についてはこれ以上はここでは触れなくてよいであろう。むしろここで最後に指摘しておきたいことはガッテラーのこの方法は実はヘロドトスの方法に拠っているということである。実際彼はヘロドトスの「構成」を研究しここから学んでいるのだが<sup>⑭</sup>、この方法がペルシア及びその支配下の諸民族の歴史を叙述していくヘロドトスの構成の仕方をより大規模に展開したものであることは一見しただけでも明らかであろう。本書「序論」で彼は「近代の長所である証明の正確さに古代の優れた叙述様式が結合されるならば、…アレクサンドロスとアウグストゥスの時代よりも遥かに正当性をもって黄金時代と評価される時代を歴史学が迎えることになるだろう」(7) と述べている。この言葉の背後に現代のヘロドトスたれんとするガッテラーの意気込みと自負とを感じるのは行き過ぎであろうか。

以上ガッテラーの世界史叙述の「構成」とその方法を見てきた。最後に『序説』におけるガッテラーの特質をまとめておきたい。まず第一に、何度も繰り返してきたことではあるが、「四大時期、八大支配民族、十二の世界史的事件」という語で示さ

れる彼の最初の世界史の理論が構築されたことである。しかもこの理論は旧来のヨーロッパ世界やオリエント世界のみではなく、紹介はしなかったがアメリカ・インディアンや、さらに中国人、日本人を始めアラブ人、モンゴル人、トルコ人など文字通りの全世界を組み込んだ理論として提出されているのである。ただし、彼が上述のように「世界」への登場の時点でその民族の歴史を叙述するという方法をとっているため、中国史が「民族移動」の章に組み込まれたり、日本や朝鮮等の歴史が第四期「諸外国」の章に組み込まれるなど、とりわけ東アジアの国々に独自の位置付けが与えられていないという欠陥が生じている。しかしこうした欠陥を有しているとはいえ、それが18世紀ヨーロッパ人が眼前にしていた全世界の歴史を包括的に叙述しようという雄大な構想と理論であったといえるであろう。この場合注意すべきことは、彼の「世界」は一方で確かに地球大のものではあるが、しかし他方それは16世紀以降のヨーロッパ人の世界進出によって成立したヨーロッパ中心の「世界」を土台にしてもいると考えられることである。というより、むしろ彼の方法は16世紀以来のヨーロッパ人の世界進出に伴う視野の拡大過程そのものを叙述の方法に転嫁したものであるとも言えるのではないだろうか。彼自身はヘロドトスの方法を採用したと考えていたとしてもその方法自体はヨーロッパ人の世界進出の過程そのものの「方法」という形での論理化と考えざるを得ないのである。第二の特質は本書の表題そのものが示している様に「普遍史」の構造を有していることである。彼の叙述は天地創造から始まって世界年代5700年代に当る彼の時代に終るが、この時間的枠組は伝統的な「6000」年という人類史の枠組の範囲に収まっている。また特に「第一期」全と「第二期」の最初の二章は『聖書』に全面的に依拠して書かれているし、キリスト以前の年代は原則としてペタヴィウスの年代学に依りつつ世界年代で示されて

いるのである。他方こうした時間の枠に収めるために古代エジプト史を約2000年間に圧縮したり、中国史の開始も1809年近くに設定するなどしている。ガッテラーは誰もが認めた極めて敬虔なプロテスタントであった。上に挙げた彼の雄大な世界史の構想はこうして、実は、プロテスタントとしてのガッテラーの宗教的世界観に基礎を置き、且つそれに奉仕するものに他ならなかったのである。そして上の二つの特質が第三の特徴に結果することになる。一言で言えば批判の不徹底性ということになるが、それはとりわけ『聖書』の記述を文字通りに信じて叙述する場合等によく見られる「非合理的合理化」<sup>④</sup>として現われる。既に『教科書』にもそれが見られるのだが、例えばアダム以下大洪水以前の祖父達の長命を説明しようとしてそれを「大洪水以前の空気が後の時代よりはるかにきれいで健康的だった」<sup>⑤</sup>こと、大地が大洪水による汚れをまだ被っておらず、そのため豊かな実りをもたらしてくれたこと等に求めたり、進んで「人間寿命の段階的短縮」について細々と論じたりするのである<sup>⑥</sup>。こうした『聖書』に対する態度は、また、ギリシア神話やローマ人を始め中国人、日本人等の神話を歴史的事実と受けとめることにつながっていく。彼は「批判家」を高く評価して自らもその一人と自負していたことは先にも触れたが、結局彼の神話の「批判」は、神話上の神々を実在の王や征服者の神格化されたものとするエウヘメロス主義を出ていないのである。勿論エウヘメロス主義が全て誤りというわけではない。しかし、例えばギリシア史の冒頭がアイギアレウス、イーナコス、ポローネウス、オーギュロス、ケクロプスといった人名で満たされている叙述やイーナコスのアルゴス建設が2127年、ヘーラクレースの死が2766年などといった記述に接すると、何か別の世界の歴史を聞いているようにさえ思われる。もっとも、ここでガッテラーに「無いものねだり」をしても意味のないことである。ここでは当時ドイ



ッで最も批判的な歴史家であることを自認していたガッテラーにしてなお『聖書』と「神話」の批判において上述のような状態だったという時代状況を確認しておくことで十分であろう。むしろ大切なのはこうした批判の不徹底性の根源を探ることであって、この点に関しては筆者はガッテラーの二つの志向の矛盾にその根源が求められると考える。即ち上述の第一の特質に現われている彼の合理主義的志向と、第二の特質に現われている彼の宗教的志向の矛盾がこうした場面に現われてくると考えるのである。彼は一方でヨーロッパ人の世界進出によって現出しつつある新たな現実世界に身を置きそれを合理的、論理的に解明しようとする。他方では旧来の伝統的プロテスタント的宗教的世界に身を置いてこれを守ろうとし、しかもこれら二つの世界を統一しようと努力したのであり、これらの二つの世界の間にある矛盾が、上に述べた様々な局面において現われてくると考えるのである。

### (3) 『世界史』(1785)

ガッテラーは先に『序説』で苦勞して練り上げた叙述様式を大きく変更した。変更の第一は「構成」を大きく変えたことである。彼は『序説』の「四大時期」をここでは以下に示すように「六大時期」に再編成している。

第一期、最古の伝説的歴史、約2600年間。

A. 大洪水が終る時までのヘブライ民族の伝説的歴史、1657年間。

B. モーセまでのヘブライ民族の伝説的歴史、約1000年間。

第二期、最初の歴史家モーセからペルシア人の支配まで、1000年強。

第三期、ペルシア人の支配からローマ人、パルティア・ペルシア人及び中国人の支配まで、400年間。

第四期、ローマ人、パルティア・ペルシア人及び

中国人の支配から民族移動の時代まで、600年間。

第五期、民族移動時代から十字軍終結まで、800年間。

第六期、十字軍から現在まで、約600年間。

彼のこの「構想」を観察すると四大時期区分から六大時期区分に変わったこと以外にいくつかの変化が見て取れる。まず第一期が「伝説的歴史」とされていることが注目される。彼自身この件については説明が必要と考え、本文冒頭で次のように説明している。「伝説とは人が昔口述の伝承と呼んだものを言う。……他の諸民族の伝説に時としてまといっている不確かさはヘブライ人の伝説においては全く除去されている。というのはそれが我々の聖書の尊崇すべき、また最も貴重な一部となっているからである。」(2) 彼が一方でこのように確信していたとしても、他方では彼のこの確信が揺らぎつつあったことも事実であるように思われる。というのは従来は文字通りに事実として受け入れていた『聖書』の叙述をここでは「伝説」の語で特徴付け、しかもそれを「構成」に反映させているのはやはり一つの大きな態度変化であると筆者には思われるからである。第二にこの「構成」を見て気付くことは、第四期から中国を世界の基本的構成員として位置付けていることである。これは『序説』において「民族移動」の章で取り上げた場合とは根本的に異なった態度だと思われる。即ちかしこでは中国は独立した一つの「諸民族体系」としての地位を与えられておらず、従ってヨーロッパ人と関係が生じた時点で初めて叙述の対象とされたのであったが、ここではそれが改められていると考えられるのである。もっとも本書は第三期までの叙述は完成し出版したのだが、その後は最後の著作に取り組み始め、結局未完のままに終わっている。そのため第四期以後はプランとしてしか残されておらず、残念ながら詳しい内容は不明である。以上のほか、上の紹介だけでは見

えないことだが、第二期と第三期の記述も従来にない新しい形式で行われている。これら各々の時期についてA.諸民族、B.歴史という二つの章が立てられ、Aではアジアやアフリカ、ヨーロッパ各地域の「各民族の個性を叙述」（序文）して、Bでは「多数の諸民族に関係または貢献し……その独自の関連性において観察されなければならない事柄のみを」（379）叙述するという形式を本書では新たに採用しているのである。例えば第二期を例にあげるとAではアッシリア人、エジプト人、ギリシア人その他で241ページ、Bではアッシリアの征服等が語られた（28ページ）後、文化史の記述が285ページにわたって行われる。その文化史の内容も農業、鉱業や冶金、金属工業、神殿や王宮その他の建築技術、宗教、哲学、諸科学や造船術、航海術に至るまで極めて広汎なものである。本書でガッテラーが重視しているのは明らかにこの「普遍的に扱うべき」（序文）Bの内容であるといえる。そしてA、B、二つの章を設けるという「この構想が他の人も、またこれまでの私も受け入れてきたものとは異なった時期区分を要求したのである」（同）と述べ、四大時期区分から六大時期区分に変えた理由を説明している。

以上「構想」との関係で観察される変化を見てきた。しかしさらにもう一つ大きな変更が本書では行われた。即ち彼は年代の枠組そのものを変えてしまっているのである。彼は『序説』まではずっとペタヴィウスの年代学に依拠してきたのだが、本書ではフランクのシステムを採用したのである。フランクのシステムについては「私自身多くの関与を行ったし、何年も歴史研究所の同僚とも極めて綿密にまた公平に吟味した」（同）と述べ、彼自身もこの新システムの一人の産みの親であると認めている。ガッテラーは元来年号の決定については極めてこれを重視し『教科書』序文においても「一見して15分もあれば決定できると見えるような年号一つにも何日も費やされている」と述べてその

苦心を吐露している程である。そしてペタヴィウスの体系の採用はそうした綿密な吟味の結果だった筈である。しかしなお彼はこれに満足できず研究を続けた結果が今回の変更であった。両システムの相違は簡単に言えばペタヴィウスがキリスト紀元1年を世界年代3984年としたのに対しフランクはこれを4181年としたということに過ぎない。そして両者はともに「大洪水」が1656年に起きたとしているから、つまりは大洪水からキリスト紀元1年までの時間的幅が約200年間拡大されたということになる訳である。たったそれだけで、言えば言えないことはない。しかし、実はこれは大変な事なのである。キリスト紀元は本来はキリスト生誕以後のみに使用される性格のものであり、「世界年代」に紀元前即ち「天地創造以前」という年号が有り得ないと同様、これを「キリスト前」にまで適用すべきものではなかった。ガッテラーも勿論この伝統的立場に立っている。従って年代の幅を200年変えるということは、1656年以後キリスト紀元1年の4181年までに生じた全ての事件の年号について再吟味と変更の作業をしなければならないということを意味するのである。そしてガッテラーはそれを行ったのである。「目次」にはわざわざ「改良された年代算定による」と自信に満ちた断り書きが付けられているが、ガッテラーの苦勞を思いはしても、読まされるほうも大変な労苦を強制されることになる。さらに当時は100を越える世界年代の体系が存在していたこともここでは想起しておきたい<sup>④</sup>。その上このように一人の生涯の中でも変更があるのだから、研究者だけではなく読者のほうもさぞとまどかったろうとの想いを禁じ得ない。もっとも、この問題は単なる「労苦」とか「煩雑」といった議論ですまされない意味を有しており、「キリスト前」という年号の算定の仕方の持つ意味や年代学の問題とともに別稿で考察する予定である。ここでは彼がこうした労苦を覚悟してもなお変更せざるを得なかった理由が



何かあるはずだということ、またその変更が「世界年代」の枠内で行われたのはそこに信仰が関与していたことを指摘するだけで先に進みたい<sup>45</sup>。

『序説』の「構想」は、先に指摘したいいくつかの問題点や矛盾を含んでいたとは言え、今日の我々からすればむしろ本書の構想より遥かに整った、かつ地球大の規模をもつ雄大な「構想」だったようにも思われる。しかもそれはガッテラーの宗教的世界観にも合致していたのである。何故それをこの時点で彼は放棄しなければならなかったのだろうか。彼自身の説明はすでに述べた。確かにこれは一つの理由であると納得はできる。というのは『序説』では政治的関係を柱として「諸民族体系」が構想され、また具体的叙述にも文化史的記述が殆ど見られないし、『教科書』時代の文化史重視の態度がそこでは希薄になっていることも事実だからである。まして今回のように文化史記述に重点を置く場合はむしろ彼の「共時的方法」のほうが叙述方法としては便利であり、従って『序説』のような構成を取りにくくなったこともうなずけないではない。本書の構想によれば一つの「時期」を構成する諸民族各々の個性を「共時的」に通覧し、そしてそれを通じてそれら諸民族の構成する「世界」のその時期における文化的段階を叙述することが容易になるからである。ただしこの場合、例えばローマ史などは第二期、第三期、第四期に分断されて叙述されることになり、『序説』におけるような「通時的方法」や「ローマ的諸民族体系」概念の有効性が十分発揮できなくなる。こうした大きな変更の決断をガッテラーに促したのは、彼は何も言っていないが、やはり18世紀という時代であったと考えざるを得ない。即ちガッテラーはすでに『教科書』時代に有していた啓蒙主義的な文化史、精神史、あるいは「世界市民的」観点重視の考え方に立ち帰り、『序説』における政治史的観点に対しこれを優先させることによりこの新構想に至ったのであろう。しかし根本的原因是上の

通りとしても、それだけでは上の変更の全てが説明できるわけではない。筆者は『序説』そのものが有していたいくつかの問題点も上の変更に関与したと推測している。まず彼が『聖書』の叙述を「伝説」として扱うようになった背後にはこの間に『序説』時代のようにそれを文字通りに信ずる事がもはや出来なくなったという事情が推測される。「序文」の中でガッテラーは今後自分はミハエリスの『聖書』からのみ引用すると断わっている。このミハエリスは彼の同僚かつ親友の一人だが、彼はイギリスからドイツに『聖書』の歴史的、批判的研究を導入した人である。ガッテラー自身もこうした動きを本書では受容している。例えば彼はモーセが最初の歴史家だったという考えは捨ててはいないが、しかし「モーセの最初の書は二人から三人の異なった著者の著述の集められたもの」(11)という説は受け入れているのである。そしていわゆるノアの洪水に関して自ら「ヤハーウェ資料」と「エロイスト資料」を比較研究して「今日では全般的洪水は不可能だったということはかなり容易に証明出来ることである」(16)と言い、『序説』で大洪水が全世界を被ったことは「確実」(44)としていた立場を放棄しているのである。勿論まだ叙述全体は『モーセ五書』に従っているし、「非合理の合理化」も行っている<sup>46</sup>。しかし、ドイツにおける『聖書』の批判的研究の進展が『序説』の段階から本書の「伝説」とする段階への変化の背後にある事は間違いないと思われる。また、『序説』におけるヘロドトスの叙述方法も本書では放棄されている。その大きな原因はやはり中国にあったのではないであろうか。先にも指摘しておいたが、この方法では隋代までは「民族移動」の章に入れざるを得ないが、しかしそれでは全体のバランスが大きく崩れてしまうからである。しかも唐代以後の中国は改めて別の場所で扱わなければならない、それではまた中国の歴史の一貫した叙述も不可能になるからである。こうした困難は本書の

ような「共時的方法」に基づいた時期区分によれば解消する。中国にも各時期毎に「世界」の一員としての位置を付与することで解決されるからである。そしてこの方法はヘロドトス的方法にまといっていたヨーロッパ中心主義を放棄したことをも意味し、それはそれでまた本書の「世界市民主義的」な構想への移行とも軌を一にしていると考えられるのである。最後に、『序説』にはもう一つ「アキレス腱」があった。エジプトである。先にも触れたがそこではエジプト史をきわめて強引に彼の理論的枠組に押え込んでいた。しかし、ガッテラー自身もそれに納得できていなかったのであろう。何故なら、実は、先に紹介した年代の幅の200年間の拡大はエジプト史の叙述の改善のために導入されたものに他ならないのである<sup>④</sup>。ところがエジプト史はヘブライ人の歴史やアッシリア、ペルシア、ギリシアの歴史とも様々な糸で結ばれている。そのため本書ではやむなく年代的編成そのものの再編成をせざるを得なかったのであった。ガッテラーのみでなく18世紀に生きた歴史学者にとってはエジプト史の「古さ」の問題は最大の難問のひとつだったのであり、場合によっては歴史像全体を崩壊させかねない強力な破壊力を秘めていた<sup>⑤</sup>。そしてガッテラーは200年の拡大で辛うじて人類史6000年という枠を守り、それによって自己の宗教的歴史観を死守し得たのであった。

#### (4) 『世界史試論』(1792)

ガッテラーは本書において彼の最後の「構想」を提出している。最初にその構想の大枠について次のようにいう。「キリスト教徒の全てが信じてきたわけではないにしても、しかしなお前提としてきた事、即ち大地はおおよそ6000年以前から人類の活動する場となってきたことが前提とされている」(同)。そして全体は1800年間を単位として区分され、各々はまた1600年と200年に区分されると述べている。具体的構想は以下の通りである。

第一期, 1800年, アダム=ノア期。最初の間人間アダムから最初の国王ニムロデまで。

1. アダム=レメク時代, 1600年。アダムからノアの洪水まで。
2. レメク=ノア時代, 200年。ノアの洪水からニムロデまで。

第二期, 1800年。アッシリア=ペルシア期。最初の国王ニムロデから最初のヨーロッパ人世界支配者アレクサンドロス大王まで。

1. アッシリア時代, 1600年。ニムロデからキュロスまで。
2. ペルシア時代, 200年。キュロスからアレクサンドロス大王まで。

第三期, 1800年, マケドニア=ローマ期。最初のヨーロッパ人世界支配者アレクサンドロス大王から新世界の最初の発見者コロンブスまで。

1. マケドニア時代, 200年。アレクサンドロス大王からスキピオとムンミウスまで。
2. ローマ時代, 1600年。スキピオとムンミウスからモハメッドⅡ世まで。
1. ローマ=パルティア=中国時代, 400年。
2. ローマ=パルティア=ゲルマン時代, 400年。
3. ローマ=スラヴ=アラブ時代, 400年。
4. ローマ=トルコ=モンゴル時代, 400年。

第四期, 約300年。

これら全ての章は大きく「A. 諸民族史」と「B. 人類史」に分けて叙述される。例えば、第三期の最初の「マケドニア時代」を例に取るとA. 諸民族史の節ではマケドニア人とその支配下にあったギリシア、エジプト、小アジア、シリアの諸民族、カルタゴ、ローマなどの諸民族について個別に合計47ページにわたって記述されている。そしてB. 人類史の節では産業と分業、技術、科学、商業と海運、家族制度、公民体制、宗教の7項目を設けて合計147ページにわたって記述している。このうち「公民体制」の項41ページ分は個別諸国家自体と世界帝国または「諸国家体系」についての記述であ



るが、本書ではこのように政治史が国家・政治制度の項目に包括され、全体として文化史的記述の中に組み込まれている。そしてこの文化史の記述が圧倒的な比重を有しているのである。

本書を『序説』と比較すると、かしこでは民族移動によって区分されていた第二期と第三期が本書ではヨーロッパ人の世界支配者の登場の前後で区分されている点を除けば、同じく四大時期に区分されている。またそこで「諸民族体系」言われていた概念が、時代区分にまでは係らないが、「諸国家体系」という語のもとに復活している。さらに、何の断わりもないので驚くのだが、年号もペタヴィウスの世界年代に戻っている。他方『世界史』と比較すると各章の叙述の仕方が共通している。かしこではA諸民族、B歴史と区分されていたところが本書ではA諸民族史、B人類史となり、またBに一層重点が置かれるようになってきた。またかしこでは「伝説的歴史」と呼ばれた第一期が本書でもやはり本文中で伝説的歴史と規定されているだけでなく、全861ページのうちたった2ページしか与えられていない。即ち批判性と文化史重視とが一段と強化されている。こうしたことを考慮すれば本書は彼の最も円熟した作品で、それは「構想」の面では『序説』を基礎に、内容の面では『教科書』と『世界史』を基礎としつつ、これら全ての総合の上に成立したものであると言うことが出来る。「彼の研究の最後の、そしてもっとも実り豊かな成果」<sup>④</sup>というヘーレンの賛辞も、まさにこうした意味において言われた評価であろう。実際我々は本書の浩瀚かつ百科全書的な叙述に触れるとその内容の豊かさに驚嘆せざるを得ないであろう。またそこでは中国人を始め東洋の諸民族にも公平な眼が注がれていて、例えばモンテスキューが東洋世界を「停滞社会」と決めつけたような態度は微塵も見られない。まさに啓蒙主義的、「世界市民的」態度が貫かれているといえよう。他方こうした印象の強い本書ではあるが、「構想」に問題が無いわ

けではない。というより、我々は第二期と第三期がそれぞれ「アッシリア＝ペルシア期」、「マケドニア＝ローマ期」と名づけられているのを見て驚かざるを得ないのである。アッシリア（バビロニア）、ペルシア、ギリシア（マケドニア）にローマを接続させる、いわゆる「四世界帝国論」は中世キリスト教的「普遍史」の基本構造に他ならないからである。勿論ガッテラー記述の具体的内容から言えば旧来の「四世界帝国論」とは全く異なったものとなっていることは既に何度も触れてきたとおりである。このような叙述内容と形式の矛盾を我々はどう考えるべきであろうか。他方また『世界史』であれほど苦労して再編成した年代的枠組についても彼はエジプト史を巧妙に折り畳んで改めて200年間を短縮し、再びペタヴィウスの世界年代に戻してもいるのである。このような新しい酒を古い皮袋に盛るようなことを一体何故彼は行ったのであろうか。それは敬虔なプロテスタントとしての彼の宗教的世界観によるものであると筆者は考える。上で引用したようにガッテラーはキリスト教徒の名において人類史の幅を6000年としていた。この6000年という時間の幅は元来はそこで人類の歴史が終末を迎えることを意味していたのであり、さらに第四の世界帝国をローマとすることはこうした終末論とも結び付いていたのである。彼自身がこの伝統的・キリスト教的終末観についてどのように考えていたかは不明である。先の文章ではアダム以来人類史が経過した時間との関係でしか述べていないからである。しかし信仰者としてのガッテラーの「時間」は明確に開始と終末を持つキリスト教的時間なのであるということ、ペタヴィウスの年代に戻ることは人類史全体を6000年という時間的枠組に約200年の余裕を残して収め直したことを意味すること、この二点は確実に言えることである。そしてこのことこそが、即ち彼の信仰こそが上の内容と形式の矛盾の根本に横たわっていると筆者には思われるのである。

#### 四、小 括

ガッテラーは『試論』のなかで「世界史はわれわれの時代に初めてそれをその名に値するものになり得る環境を有するに至った」(2)と述べている。彼は自己の生きた時代環境に片足を置き、アジアの諸民族や新大陸などに関する膨大な「素材」を収集しつつ、世界史構成の論理を追求し、新たな「世界史」を求める時代に対して「その名に値する」叙述で応えようと努力した。その結果彼が提供したのは旧来の「普遍史」とは全く内容の異なる百科全書的・文化史内容に重点を置く世界史であり、この点でフランス、イギリスにおける啓蒙主義的歴史叙述と質を同じくするものと位置付けることができる。他方、彼のもう一方の足は旧来のプロテスタント的世界観に置かれていた。このプロテスタント的世界観自身も時と共に変化はした。その変化は『世界史』以後ようやく『聖書』や神話批判の形で現われ始める。しかしそれはついに実をつけることなく終わってしまったのである。

ドイツ啓蒙主義歴史学の劈頭に立つガッテラーにおいては結局後者の側面がこうして最後まで優位を保持したと言わざるを得ない。彼は最後までその世界史をアダムとエヴァから開始し、6000年という人類史の枠組と世界年代に固執し、さらに最後の作品では古い「四世界帝国論」の亡霊まで呼び出しているからである。他方、信仰者としての彼においてはこうした「形式」そのものが重要であったにしても、しかし彼の叙述の「内容」そのものは上に見たようにそれに抵抗している、というよりはそれを否定していると言えよう。そしてこうした意味でガッテラーによってドイツ啓蒙主義歴史学は旧来の「普遍史」からの脱却の第一歩を踏み出したと筆者は考える。彼の最後の作品の表題が象徴しているように、彼の四種の世界史叙述全体が言わば「普遍史」克服のための「試論」だったのである。

#### 注

- ① 以下の学説整理については Reill, P. H., *History and Hermeneutics in the Aufklärung: The Thought of Johann Christoph Gatterer*, in "Journal of Modern History", (March 1973) を参照 (以下, Reill (1) と略記)。ただし詳しくは別稿で検討するのでここでは代表的著作を挙げて傾向を述べる程度にしたい。
- ② 伝統的見解を代表するのはマイネッケである (Meinecke, Fr., *Die Entstehung des Historismus*, 1936)。ここでは啓蒙主義時代が扱われはしても、啓蒙主義的歴史学者が高い評価を受けているわけではない。そして「歴史主義」形成に大きな足跡を記した人々として位置付けられていくメーザー、ヘルダー、ゲーテを (レッシングを除いては) 誰も「啓蒙主義者」とは考えないであろう。
- ③ Dilthey, W., *Das achzehnte Jahrhundert und die geistliche Welt*, 1901.
- ④ Fueter, E., *Geschichte der neueren Historiographie*, 1936, S. 375. 「これらの人々は見解や方法において相互に異なり、他の啓蒙主義歴史家に対していかなる特殊なグループをも成してはいなかった。」
- ⑤ 千代田 謙, 『啓蒙史学の研究』第一部, 三省堂, 昭和20年, 593~616 ページで二人について議論されているのが管見の限りでは唯一といえる。他には前川貞二郎, 『歴史を考える』ミレルヴァ書房, 1988. では啓蒙主義期の世界史叙述 (『近代的世俗の世界史像』) との関係で何度か積極的評価を込めて言及されている。
- ⑥ Butterfield, H., *Man on his Past; The Study of Historical Scholarship*, 1955.  
Gay, P., *The Enlightenment*, 1967-69.
- ⑦ Iggers, G. C., *The German Conception of History*, 1969.  
Reill, P. H., *The German Enlightenment and the Rise of Historicism*, 1975. (以下, Reill (2) と略記)
- ⑧ Kraus, A., *Vernunft und Geschichte*, 1963.  
Blanke/Rüsen (Hrsg), *Von der Aufklärung zum Historismus*, 1984.  
*Wissenschaften im Zeitalter der Aufklärung*, N & R, Göttingen, 1985.  
Bödecker/Iggers (Hrsg), *Aufklärung und Geschichte*, 1986.  
Rüsen/Lämmert/Glötz (Hrsg), *Die Zukunft der Aufklärung*, 1988.  
Kocka, J., *Geschichte und Aufklärung*, 1989.  
また, Wehler, H.-U. (Hrsg), *Deutsche Historiker*, 9. Bd., 1982. でシュレーツァーの略伝を上記のレイル



が記述している。

- ⑨ J. S. Ersch und J. G. Gruber, Allgemeine Encyklopädie der Wissenschaften und Künste, Leipzig 1852. S. 376.
- ⑩ Wesendonck, H., Die Gründung der neueren deutschen Geschichtsschreibung durch Gatterer und Schlözer, Leipzig 1876. S. v.
- ⑪ 「彼の名声のうち恒久的なものは彼の歴史補助科学、とりわけ古文学における功績である。」(Wegele, F. X., Geschichte der Deutschen Historiographie seit dem Auftreten des Humanismus, 1885. S. 760.)
- ⑫ 特にイッガース, レイル。
- ⑬ Ersch und Gruber, S. 379.
- ⑭ Fueter, a. a. O. S. 377.
- ⑮ Ebenda, S. 375.
- ⑯ ガッテラーに関する評伝はまだない。以下は人名辞典の A. D. B., H. D. B., Ersch und Gruber と Wesendonck の上掲書の伝記的記述によっている。
- ⑰ Ersch und Gruber, S. 376.
- ⑱ 父が勉強を妨げるので屋根瓦を剥いで明りを取って隠れて読書したとか、ストーブ係になり、級友が来る前に登校して勉強したなどという話が伝えられている。
- ⑲ “Thesis inaugurales ex omni philosophia selectae, 1751.” で Magister になり、次いで “Disertatio praevia de adornanda in posterum Germania sacra medii aevi, 1752.” で大学私講師の資格を獲得した。
- ⑳ A. D. B., S. 410.
- ㉑ Ersch und Gruber, S. 381ff. 及び Wesendonck. S. 69. 彼は新聞、雑誌等定期刊行物は年末にまとめて読むことにしており、その間にはこれらに一切目を通さずに著作や研究に没頭した。そして死の当日の朝に尚彼は講義ノートに手を入れていたという。
- ㉒ Gatterer, J. C., Historia genealogia dominorum Holzshuerorum ab Aspach ets. cum codice diplomatico, multisque figuris in aes incisus, Nürnberg 1755.
- 第2部は原稿は完成していたが出版されなかった。
- ㉓ 以下, Wesendonck, a. a. O. S. 54f.
- ㉔ 以下, Ebenda, S. 1 - 57.
- ㉕ Puffendorf, S., Einleitung zu der Hitorie der vornehmsten Reiche und Staaten, Frkf. A. M. 1682.
- ㉖ 後藤末雄, 『中国思想のフランス西漸』 1, 2, 東洋文庫, 平凡社
- ㉗ Wegele, a. a. O., S. 782.
- ㉘ ガッテラーの歴史補助科学に関する著作には以下のものがある;
- Handbuch der neueren Genealogie und Heraldik,

Nürnberg 1759 - 1769.

- Abriß der Heraldik, Nürnberg 1766, 1774.
- Abriß der Heraldik, Göttingen, 1773, 1792.
- J. C. Gatterers Abriß der Heraldik, Göttingen 1778.
- Praktische Heraldik, Nürnberg 1791.
- Handbuch der neuesten Genealogie, Nürnberg 1762.
- Abriß der Genealogie, Göttingen 1788.
- Abriß der Diplomatie, Göttingen 1792, 1796, 1798.
- Praktische Diplomatie, Göttingen 1799.
- Abriß der Geographie, Göttingen 1775.
- Abriß der Chronologie, Göttingen 1777.
- ㉙ 上級学生に対して「一種のゼミナール」(Wegele, S. 761)を開講して訓練を施した。発行した歴史学専門雑誌は次のものである。
- “Allgemeine historische Bibliothek,” 16Bde., Halle/Stuttgart 1767 - 71.
- “Historische Journal,” 16Bde., Göttingen 1772 - 81.
- ㉚ N. D. B., S. 90.
- ㉛ 彼は最後の著作を除きそれぞれについてその要約書を出版しているので、四種類だが計7編の世界史叙述が残されている。
- Handbuch der Univesalhistorie nach ihrem gesamten Umfange von Erschaffung der Welt bis zum Ursprung der meisten heutigen Reiche und Staaten. Göttingen 1761. (以下、本文中では「教科書」、注の中では Handbuch と略称する)
- Abriß der Universalhistorie in ihrem ganzen Umfange, Göttingen 1765.
- Einleitung in die synchronistische Universalhistorie zur Erläuterung seiner synchronistischen Tabellen, Göttingen 1771. (『序論』, Einleitung と略称)
- Abriß der Universalhistorie nach ihrem Umfange der Welt bis auf unseren Zeiten, Göttingen 1773.
- Weltgeschichte, Theil 1, 2, Göttingen 1785. (『世界史』と略称)
- Kurzer Begriff der Weltgeschichte, Göttingen 1785.
- Versuch einer allgemeinen Weltgeschichte, Göttingen 1792. (『試論』と略称)
- 前期の二種の著作群にはいずれも「普遍史」の語が使用されているが、後期の二種の著作群にはいずれも「世界史」の語が使用されていることにも注意されたい。
- ㉜ どの本も序文のみはページ数が付されていないので以後

「序文」とのみ記す。また引用文は「序文」以外は全て本文中にページ数を明記する。

③ 目次は以下の通りである；

1. 天地創造からノアの洪水まで。 2. ノアの洪水からアブラハムまで。 3. アブラハムからバビロン捕囚終了までの神の民。 4. モアブ人、アンモン人、ミディアン人、エドム人、アマレク人、カナン人、ペリシテ人。 5. エジプト人。 6. 古代シリアの諸王国。 7. フェニキア人。 8. バビロニア人、アッシリア人、メディア人。 9. ペルシア人。 10. ケルト人、スキュティア人。 11. フリュギア人、トロヤ人、ミュシア人、リュディア人、キリキア人。 12. アラブ人。 13. ギリシア人。 14. インド人。 15. アレクサンドロス大王と後継者達。 16. カルタゴ人。 17. ローマ人。 18. ユダヤ人。 19. キリスト教徒。 20. 中国人。 21. 朝鮮人とチベット人。 22. 日本人。

④ Kapitz, P., Japan in Europa, 1990. によれば地理学の教科書には扱われた例があるが歴史学の教科書ではまだなかったようである。

⑤ Petavius, Dyonisius, Rationarum Temporum, 1627. 本書は1720年にもなおケルンで出版されているが、これによれば彼は世界年代3984年をキリスト紀元1年とし、キリスト誕生を3980年としている(252頁)。ガッテラーは彼の体系を基本的に受け入れているが、キリスト誕生については3983年とする。

⑥ ガッテラーが主として依拠しているのはフランスではロランとデュ・アルド、ド・ギーニュの三名である。イギリスでは次の『普遍史』である。

An universal history from the earliest account of time to the present, compiled from original authors, 65 vols, London 1736 - 1765. 本書は多数の学者の協力で書かれ、「包括的で学問的記述の最初のもの」(Wegele, S. 783)とも「その名に値する最初の世界史」(Fueter, S. 322)とも言われている。ドイツ語には当時バウムガルテンによって詳細な注釈を付して翻訳されつつあり、ガッテラーはそれも利用したし、やがて自ら指導して抄訳を出版している。

⑦ ガッテラー自身の手になる梗概と年表を資料1, 2として最後に収録しておいたので参照されたい。

⑧ 「プラグマティズム」を「実用」という意味でとらえてはならない。それは彼と彼の時代においては「静的であると同時に動的な連関を問題とする研究課題の批判的・分析的研究と考えられていた」(Reill (1), S. 35)のである。即ち歴史的諸事件の研究に於いて、広範な因果的関連の批判的研究によってその真の歴史的意义を見出すとする態度を意味しているのである。

⑨ フン族と民族移動を結び付けた最初はジョゼフ・ド・ギーニュ、『フン族、トルコ族、モンゴル族史』(1756 - 58)である(ルイ・アンビス『アッチラとフン族』文庫クセジュ10ページ)。ガッテラーが中国史について最も依拠したのも本書であり、両者の因果関係について「私は二、三年前に初めて知った」(Handbuch, 2. Bd. S. 5)と述べている。

⑩ Gatterer, J. C., Der Plan Herodot's, in "A. H. B." 2. Bd.

⑪ Reill (2), S. 79.

⑫ Handbuch, 1. Bd. S. 143.

⑬ Einleitung, s. 60ff.

⑭ 上記のイギリスで出版された世界史(An universal History)にはキリスト誕生を世界年代で3616年から最高6984年とする者まで96種が集められている。また、前川貞二郎、『歴史を考える』ミネルヴァ書房(1988)には6894~3483年までの「200ほど」という数があげられている(45ページ)。

⑮ 前川貞二郎、「キリスト紀元」序説(上掲所収)参照。

⑯ 例えば、大洪水が部分的だったことから「ノアが集めたのはただ彼が住んだ地域にいて、彼に知られていた獣の一番だけであった」(19)と述べる。つまりこれにより箱船の大きさが『聖書』の記述通りで十分だったとする一方で、また動物が絶滅することもなかったのだと説明するわけである。

⑰ 『序論』ではプサメティコス以前には一度も統一されたことが無かったと断じ、全王朝を地方的王権で同時代に併存していたものとしてエジプト史を大幅に短縮した。今回はプサメティコス以前に200年間の統一時代を挿入したため、全体がその分だけ拡大せざるを得なくされたのである。

⑱ 藤縄謙三、『歴史の父ヘロドトス』新潮社(1989), 477ページ以下参照。

⑲ Heeren, A. H. L., Historische Werke, 7. Theil. S. 3.



資料1；ガッテラー「世界史」(『Einleitung』, 1771) の構成  
 ;「四大時期, 八大支配民族及び十二の世界史的事件」(S. 37)。

民族も王国も*  存在せず	<div>I. 天地創造 (世界紀元1年)</div> <div>墮罪 (世界紀元1) 諸技術 (900 - 1000) 大洪水 (1656)</div>	I  歴史的応急手段 の時代; 神話と啓示の時 代
八大支配民族  または  八大従属体系	<div>II. 諸民族の形成 (1809)</div> <div>アッシリア人 (1874) ペルシア人 (3425) マケドニア人 (3648) ローマ人 (3838/3939) パルチア人 (3808/3845, 但し AD226以降ペルシア人)</div> <div>偶像崇拜 (1800年代) 科学の発生 (1800年代)  キリスト生誕 (3983)</div>	II  聖書記者と古典 的歴史家の時代
	<div>III. 民族移動 (5世紀)</div> <div>ドイツ人とスラヴ人 (5世紀) アラブ人 (622) モンゴル人とトルコ人 (1209/1369)</div> <div>教皇 (AD606) 及び マホメット (622) 十字軍 (1096~1291) 印刷術 (1440/30), コンスタ ンチノーブル陥落 (1453) 及び諸科学の再生</div>	III  年代記作家と古 文書書記の時代
同盟体系  または  支配体系	<div>IV. アメリカ発見 (1492)</div> <div>宗教改革 (1517) とトリエン ト宗教会議 (1545~1563) ヨーロッパの勢力均衡 (16世紀) 及びウエストファリア条約 (1648) 新しい哲学 (17, 18世紀)</div>	IV  収集家, 批判家, 美学者, 及びプ ラグマティスト の時代

資料2；共時的年表 (Gatterer, 『Einleitung』, 1771, S. 1092 - 1096)

1. 天地創造と墮罪
  7. エノク, メトセラ。
  9. レメクの息子達, または諸技術。
  11. ノア。
  16. 大洪水。
18. 諸民族の形成; ニムロデ, ニノス, またはアジア人の支配
  - 堯, メネス, アイギアレウス: 偶像崇拜, 科学: ゾロアスター, ターウト, カベイロス達。
  19. スタプロバテス, 日本人。
  20. アブラハム, カナン人, ケダラオメル。

21. ヤコブ, イーナコス, ポローネウス。
22. エドム, ヨセフ, シドン, スパルタ, プロメテウス。
23. オイノートルス, オーギュロス。
24. ケクロブス, デウカリオン, ヘレン, カドモス, ラケダイモン, ダナオス, タルギタウス, モーセ。
25. ヨシュア, トイケール (ダナウス), ミノス1世, オルフェウス。
26. チュレーノス, アスクレピオス, ペロプス。
27. 英雄達, 技術家達, ティルス, サンコニアートン。
28. ヘーラクレイダイ, 朝鮮人, ラムセス, ケオプス。
29. コドロス, ダビデ, ホメロス。
30. ヤロベアム, フィドン, ディドー。
31. リュクルゴス, サルダナバル, カラーヌス, オリンピック。
32. ブル, ロムルス, ナボナッサル, シラクサ。
33. 内裏, メディア, ネコ, ペロヴス, ネブカドネザル: ミレトスのターレス, イソップ, アナカルシス, ザレウコス, ソロン。
34. キュロス, タルキニウス・スベルプス, 孔子, カーロンダース, ピュタコラス。
35. エズラ, ヘロドトス, ヒポクラテス, ディオクレス, ソクラテス, プレンヌス。
36. フィリッポスとアレクサンドロス大王, 又はヨーロッパ人の古代世界支配, アリストテレス, アレクサンドリア図書館。
37. アラトゥス, アルサケス, トイマン, ハンニバル: エウクレイデス, エピクロス, ゼノン, 70人訳者, ペロッス, マネト, ファビウス・ピクトール。
38. ローマ人とパルティア人の支配: マカベア朝, キンブリア人, エンニウス, ポリュビオス。
39. スラ, カエサル, アウグストス: ウィトルウィウス, ベルギリウス, ディオドルス・シクルス。
40. キリスト, アルミニウス, プリトン人, フン族, ストラボン, プリニウス。
41. マリコマンニ族, ザクセン族, グノーシス派, プトレマイオス。
42. アレマン族, フランク族, ペルシア人: 隠者, マニ教徒: ユリウス・アフリカヌス, ディオゲネス・ラエルティウス。
43. コンスタンティヌス大帝, フン族, テオドシウス大帝: 修道僧, エウセビウス, ウルフィラス。
44. 民族移動: アッティラ, クロヴィス: 僧侶の結婚禁止, 僧大司教職, 煉獄: ドイツ諸法典, マソラ学者達。
45. サラセン人, スラヴ人, アヴァール人: ユスティニアヌス, アルボイン: 聖ベネディクト, ディオンとパリュムの修道院: タルムード, 絹。
46. ボニファキウス3世, マホメット, オマール, ムアーヴィア: 教会分裂, パイプオルガン, 時計, 無知。
47. ヴァリド, ペラギウス, アブダラー: ピピン, アカエウス, フングス, イヴァル・ヴィドファドミ: 偶像禁止問題, 聖ボニファティウス, ヨハネス・ダマスクス, アル=マンズール。
48. カール大帝, ノルマン人, エグベルト, クヌート2世: ピアスト, ルーリック, ハラルド, ハンガリー人: アル=マームーン, オットフリート。
49. ブィード人, オットー大帝, ステファンとプロイセン人: 列聖, 教養ある諸侯と尼僧。
50. ドゲルル=ベク, ヴラティスラス, フルグンド侯ハンリッヒ, ゴットフリート: 枢機卿, アヴィセンナ, グレゴリウス7世, プロヴァンス詩人達。
51. 満州, ロジャー2世, アルフォンス1世, サラディン, インカ人: 聖ヨハネ騎士団, ヴァルド派, ドイツ騎士団: ユルナリウス, アベラール, グラティアヌス。
52. ボードワン, チンギス汗, エルデヴィル, マムルーク, クビライ汗, メキシコ人: ハンザ, ヴェネツィア: 異端審問, 化体説, 大学: フリードリッヒ2世, アルベルツ・マグヌス, 賢者アルフォンス。
53. オスマン, テル, ティムール, マルゲリータ: タウラー, ウィクリフ: ゴヤ, ダンテ, シュヴァルツ, ペトラルカ
54. アメリカ及び東インド, 又はヨーロッパ人の新旧両世界支配  
 ドライ=ラマ, クリスチャン1世, マホメト2世, イヴァン・ヴァシリエヴィッチ, カトリック王フェルナンド, マクシミアン1世, バーブル, イスマーイール: フス, グーテンベルク, ウルグ=ベク, 諸科学の再生。
55. ハッサン, グスタフ・ヴァサ, ブランデンブルク侯アルブレヒト: コスマス1世, ケットカー, オラニエ侯ウィリアム, 公方: レオ10世, ルター, ロヨラ, コペルニクス。
56. ウエストファリア条約, 新しい哲学, 自然論者と社会論者: 大ブリタニア, ポルトガル, 満州, アブルガシ汗
57. ビョートル大帝, シャー=ナジュール, ホンタイジ: プロイセン, サルディニア 及び 両シチリア: ライプニッツ, ニュートン, ヴォルフ, ミュンヒハウゼン。